

私の父は酒も煙草も好きで、ことに酒は毎晩欠かしたことがありませんでした。来客があると、それに事寄せてふだんより余計に酒が飲めるのを楽しむ、という風でした。

ところが、その子どもの私は、酒も煙草も嫌いで、煙草などはまだ一度も口にしたことさえないほどです。その理由は、父が「お父さんは、自分が吸っている煙草を、お前に吸うなどはいわない。でも、これは習慣で、自分ではつまらぬものだと思っても止められないのだ。それに、煙草は初めからうまいと思って吸えるものではない。初めこなつまらぬものを口にしたらばかりに、今はもう止めようとしても止められなくなったのだよ」と、自身を責めるようにしみじみと語ったのが、今も脳裡にあるからです。

それは決して強烈な印象ではありません。頭の片隅に置かれた程度のものです。しかしそれだけのことで、私は、煙草を口にしてみようという気が少しも起こらないのです。

酒を飲まない理由は、これと全く違ってきます。酒を飲まない時の父、とりわけ改まった時の父には、よく甘えた私でも近づきにくいほど

の威厳を感じさせるものがありました。酒を飲む時の父には、これがあの父かと思うほどの態度の崩れが見えました。

泥酔した父を見たことはありませんが、酒を心から楽しんでいる父の姿からは、父らしいいつもの威厳が見えず、それが若い私にはさびしく思えました。「父は何であんな酒を楽しんでいるのか」といふかると共に「私はあんなものは飲まないぞ」と思ったものです。

父は、常に酒を“百薬の長”と誉め、私にも飲むなどは一度も言ったことがないのに、私は、このように酒嫌いになったのです。

真剣に生きる姿をみせよう

家庭教育というものは、子どもに「……せよ」「……するな」と言うことではなくて、真剣に生きる親の姿をそのまま子どもに見せることであり、時に自分の真情を子どもに吐露することだ、と思います。「するな」と言われれば、逆にしたくなるのが人情です。父が、煙草を吸いながら「お前は吸うな」と言われたら、私も煙草を吸うようになったかも知れま

せん。

また、良い悪いは親に教えられなくても、自然とわかるもののようで、酒乱の親を持った子どもはたいてい酒嫌いになっているのはそのためだと思われます。

ところで、24歳になる私の長男は、このごろ酒も煙草もやっているようです。これは、私がやらなかったために、これに対する批判力が育たなかったせいだ、と私は考えて自分を反省しています。

私の父のこと、それから私がなぜ酒や煙草を口にしないか、について私の経験を子どもに物語っていたならば、子どもも、私と同じように酒、煙草を口にしなかったのではなかったか、と考えられるのです。

さて、このように、家庭教育というものはそれぞれの世代における経験から、知恵を引き出してそれを次の世代へ伝えることだと思えます。その意味では、私は、自分の経験に十分な考察を加えて知恵を引き出すことを怠り、従ってこれをわが子に伝えなかった「親としての資格に欠けた」親と言わなければなりません。

昔の家庭教育の再確認を

昔の親は、こういう教育のほかに、その家に伝わる職業教育をもしていました。私は、このことについて、もう一度新しい眼で見直す必要があると思うものです。

昔は世襲制度、今は職業選択の自由な時代なのだから、それは時代錯誤ではないかとおっしゃる方もあろうかと思えます。しかし、親の仕事を受け継ぐことくらい、子どもにとって有利な条件の仕事はないではありませんか。

家内工・商業の場合は、子どもが毎日その生活の中から、その面の知識を自然に吸収することができますし、教師や官公吏の場合でも、その面の参考図書などが家にあり、それに親しむ機会があって、子どもがその親の仕事を受け継いだ場合には、親は、三十年にわたる体験から得た知恵により、子どもに適確な助言を与えることができるのです。

ところで、職業選択が自由になった明治以後は、それまでの世襲の反動として、世襲の良い面さえもすっかり捨て去り、職業は子どもの全く自由な選択に任せるべきものとなってしまいました。

私の父もそうでしたが、私も長男の職業選択にそうでした。親の職業に関係なく、全く子どもの自由な選択に任せるのが理解ある親の態度だと信じていたのです。その結果、長男は、私と道を異にして機械工学を選んだのです。

子どもの職業選択と親

子どもが、多くの点で親に似ているとすれば、当然、職業の点でも親が得意なら子どもも得意になるはずで、子どもは親の職業を受け継ぐのが最も有利なはずだ、と気が付いたのは迂闊にも次の長女の大学進学が問題になった時です。ある時は医者になりたいと言い、ある時は小説家になりたいと言い、文学は英文学をやりたいと言い、また、ドイツ文学をやりたいと言うのを、いつもそのまま容認していました。

しかし、高校の成績は、特別に勉強しているのでもないのに、私の専門である国語漢文がずば抜けて良いのです。私ははっと思いました。「今までどうしてこんな平凡なことに気が付かなかったのだろう」と。

そして早速娘と話し合いました。娘も簡単に理解してくれました。今、娘は、大学で私の専門と同じ中国文学を学んでいます。この道が、娘にとって最も有利な職業であることは言うまでもありません。私にとっても、百万の味方を得た思いがします。やはり、この世の中で、だれよりもこの娘が、私の学問と私の思想もよく理解し、受け継ぎ、発展させてくれるだろうと思います。